

地域研究、人類学そして文学・文化研究 大塚和夫

- ①佐藤次高ほか編 (2003-2005) 『イスラーム地域研究叢書』(全8巻) 東京大学出版会。
- ②板垣雄三 (1992) 『歴史の現在と地域学——現代中東への視角』 岩波書店。
- ③立本成文 (1999) 『地域研究の問題と方法——社会文化生態学への試み(増補改訂)』 京都大学学術出版会。
- ④G. C. スピヴァク (2004) 『ある学問の死——惑星思考の比較文学へ』 上村忠男・鈴木聡訳、みすず書房。
- ⑤タイプ・サーレフ (1978) 「北へ遷りゆく時」 黒田寿郎訳 『現代アラブ小説全集』 第8巻、河出書房新社。

「地域研究を再考するためのリーディング・ガイド」ということであるが、私は「地域研究」の専門家ではない。専門を問われると、社会(文化)人類学と中東(アラブ)民族誌学と応えるようにしている。前者で学問分野名を、後者で主たる調査・研究地域を示すことにしているのである。

さて、そのような私のポジショニングからするならば、今回の原稿依頼にどのように応じるべきであろうか。人類学と地域研究の接点にあるような著書を選ぶか、それともアラブ世界に足しげく通っている者としてアラブ・中東世界研究にとって参考になると思える作品を紹介するか。しかし、ここではそのいずれの方法をもとらないことにした。

一九九七年度から五年間にわたり、文部科学省の支援により「現代イスラーム世界の動態的研究」という大型プロジェクトが進められた。その略称は「イスラーム地域研究」であり、代表は佐藤次高東京大学教授(当時)であった。

アラブや中東を無条件でイスラーム地域と置き換えることができるかどうかは疑問があり(これらの地域にはキリスト教徒やユダヤ教徒もいる)、また、イスラームの広がりの中東の枠内にとどまるものではない(世界でもっともムスリムの数が多い国家はインドネシアである)。しかし、イスラームの発祥の地がアラビア半島であり、

その宗教「文明システムの確立や展開の過程でアラビア語が果たしてきた役割は決定的に重要なものがある。

その意味において、アラブ世界、そして歴史的に多くのイスラーム系諸王朝が興亡を繰り返した中東地域の研究とイスラーム研究とが密接な関係にあることは誰も否定できない。それだけに「イスラーム地域研究」プロジェクトにも多くの中東研究者が参加した。

同プロジェクトの成果の一部は、東京大学出版会から①『イスラーム地域研究叢書』と銘打って公にされている。二〇〇三年度に『イスラーム地域研究の可能性』『現代イスラーム思想と政治運動』『イスラーム地域の民衆運動と民主化』『比較史のアジア——所有・契約・市場・公正』とそれぞれ題された四冊が刊行された。つづいて二〇〇四年度には『イスラーム地域の国家とナショナリズム』『イスラームの性と文化』『イスラームの神秘主義と聖者信仰』『記録と表象 史料が語るイスラーム世界』の四巻が出版された。学術的な論文集の形式をとっており、一般読者には馴染みやすいものとはいえないかもしれないが、今日の日本におけるイスラーム世界研究の学術水準を示すものとなっている。

私はその第一巻『イスラーム地域研究の可能性』に、「人類学とイスラーム地域研究」という題の論文を寄稿した。イスラーム世界を対象とした人類学的研究のあり方を私なりにまとめたものである。そのなかで、「イス

リーディング・ガイド●

「イスラーム地域・研究」か「イスラーム地域研究」かという問いを立て、その異同を検討した。「地域研究」という立場からすれば、「イスラーム(を対象とした)・地域研究」というものが成り立つことが前提であろうが、その場合「地域研究」とは何かと問わなければならない。

別ないい方をしよう。中東や東南アジア、アフリカ、インドといった「地理的」すなわち地図の上に面で落とすことができる地域であれ、イスラームといった「ネットワーク的」すなわち世界に広がるムスリムの関係性に基づく地域であれ、これまでの地域研究プロジェクトの多くは、特定地域名といういわば冠をかぶせて実行されてきた。では、冠なしの「地域研究」が、一つの学問分野として自立できるのか、できるとすればどのようなパラダイムが存在するのか。このような問いを発する背景には、かつての機能主義や構造主義といった強力なパラダイムが消えうせたと嘆かれてはいるものの、それでも一つの学問分野としてある程度共通の術語、分析枠組み、方法・理論などを持ち、議論の場を共有している人類学の今日的あり方が控えている。

前述の拙論のなかでは、そのような冠抜き「地域研究」パラダイムの構築を目指す試みとして、これまで日本における地域研究をさまざまな側面からリードしてきた二人の先学の業績を紹介した。そこで取り上げた著作

は、②板垣雄三氏の『歴史の現在と地域学』と③立本成文氏の『地域研究の問題と方法(増補改訂)』である。

二人は、それぞれ中東・イスラームと東南アジアを主たるフィールドとしてきたのだが、前述の著作ではそのような地域の枠を外した「地域研究」そのもののパラダイム確立を試みた議論を展開している。これらの先駆的業績に対する私のコメントは、先にふれた拙論を参照して頂くとして、地域研究が一つの自立した学問分野と主張するためには、避けては通ることのできない理論・方法的なさまざまな課題を提示している貴重な仕事である。

さて、残りのスペースでは、話題をがらりと変え、社会科学に傾きがちな地域研究に対して、人文学の方からも熱い連帯のメッセージが発されていることにふれておきたい。紹介したいのは最近翻訳された、④G・C・スピヴァクの『ある学問の死』である。いうまでもなく著者は、現在はアメリカ合衆国で教鞭をとっているインド・カルカッタ出身の女性研究者。デリダの著書を翻訳し、フェミニズムとポストコロニアリズム批判を結びつけ、インドの歴史学から生まれたサバルタン研究にも介入している。

同書でスピヴァクが「死」を宣告しているのは、彼女の専門分野でもある「比較文学」である。『紅樓夢』の若干の章と数頁の漢詩によって「中国文学」を代表させようとすると、世界文学アンソロジー(読本)の編集に躍

●リーディング・ガイド

起になる同僚を見て、彼女は「比較文学」という学問分野の死を感じる。そのような編集作業においては、アメリカ主導の英語中心主義で「世界文学」を語ることが、毫も疑われないのだ。

だが、スピヴァクの「死亡宣告」は、同時に「再生への希望」を語るものでもある。そしてその際に彼女が持ち出してくるのが、地域研究(Area Studies)である。「わたしは比較文学者としての活動を開始した当初、比較文学とは世界全体にわたる広汎なものであるべきだと考えていた。そして現在もなお、地域研究において(さらにまた人類学とその他の「人間諸科学」において)実践されている知識生産のポリティクスは新しい比較文学と触れあうところがあると信じつづけている。新しい比較文学にあっても、金看板は対象となる地域の言語と慣用的な語法にたいする目配りでありつづけているのである」(邦訳八頁)。

英訳だけを読んで分かった気になるのではなく、「地域の言語と慣用的な語法(jargon)」に細心の注意を払い、世界各地の「文学」を精読していくこと、それこそスピヴァクが「新しい比較文学」が誕生するための条件として主張しているものである。その際には地域研究、および人類学などの人間諸科学が、重要な支援をしてくれるはずだ。そして両者の協力は、地域研究の側にも益をもたらすだろう。「他者の言語に対して、[地域研究な

どが行っているように」単なる「フィールドの」言語としてアプローチするだけではなく、伝統的に言語の取り扱い方に関しては洗練されていた比較文学によって、地域研究（歴史学、人類学、政治理論、社会学）を補完させよう」と彼女は提案する（邦訳一五頁、一部改訳）。

このような提案の実践例として、同書でスピヴァクはいくつかの文学作品を「地域」に基づきながら分析していく。イギリスのヴァージニア・ウルフ、ベンガルのマハーシュヴエーター・デーヴィーと並んで、スーダン人の文学者の作品が取り上げられている。その名前は邦訳では、タイェブ・サリ、作品名は『北部への移住の季節』となっている。だが、この作品はすでに異なった題名で邦訳されていたのだ。

⑤ タイイブ・サリフの作品『北へ遷りゆく時』（アラビア語原題は 'Mawsim al-hira iia al-shimal'、英訳は Season of Migration to the North）は、一九七〇年代後半に河出書房新社から刊行された「現代アラブ小説全集」（全一〇巻）の第八巻に収録されている。訳者は黒田寿郎氏。作者名は「タイイブ・サレフ」と表記されている。

アラブ文学研究者の奴田原睦明氏がこの作品の優れた読解（「オーセンティックなものへのヒジュラ・越境」モダニズム研究会編『越境する想像力』人文書院、二〇〇四年）のなかで的確に指摘しているように、この作品の原

● ガイド・リーディング

題で注目すべきは「ヒジュラ (hijra)」である。この語は現代的文脈で「移住、出稼ぎ」などの意味合いもある。だが、この語を耳にしたアラブ人の多くは、まず七世紀のイスラーム勃興期に生じたヒジュラ、すなわち預言者ムハンマドのメッカからメディナへの「聖遷」（遷行、などの訳語もある）を思い出すだろう。したがって、「遷りゆく」という黒田氏の苦心の訳語が光るのである。奴田原氏は「この作品の表題にあるヒジュラという言葉は読者を歴史の深みへパセティックな感情を伴って誘い込む力を持つが、そういうヒジュラという語彙に備わった語感に作者はこの作品によって新しいニュアンスを加えようとしている」と述べ、ヒジュラを「越境」という概念と重ね合わせて議論を展開する（前掲論文五三一―五四頁）。

この小説の舞台となっているのは、北スーダンのナイル川に面した農村である。類似した環境で人類学的調査をした私としては、何かと思いがたるところのある情景描写が作品内にちりばめられている。ただ、ここはそのことにふれる場ではない。

スピヴァクは、比較文学研究が惑星的なもの (planetary) —— 彼女は地球的 (global) という言葉から區別してこの語を用いている —— としてみずから想像するために、地域研究によって補完される必要があると説いている。地域研究（そして人類学）へのこの好意ある

呼びかけに、呼びかけられた側も応えていく必要がある。だが問題は、今日の日本の状況において、文学・文化研究と地域研究・人類学とのあいだに、どのようなコミュニケーションの場が確保されているかである。スビヴァクの訳者が、サーリフの翻訳の存在を知らなかったこと、それはこのような場がまだ十分に成立していないことを如実に示している。そしてそのような働きかけを積極的に行ってこなかった地域研究・人類学の側にも、咎はあると思われる。地域研究の発展のためにも、より広範な学問諸分野の研究者が集い、自由に意見を述べ合い、より広い視野から特定地域、そして世界を語るフォーラムの設置とその活動の活発化が切に望まれるのである。

(おおつかかずお／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

●リーディング・ガイド